

【別添資料2】福岡市の離島振興計画(案)について

※福岡市の離島振興計画案は、離島振興法第4条に基づき、市町村が、当該市町村に係る離島振興計画の案を作成し、都道県に提出するもの。

福岡市の離島振興計画(案)
(玄界島・小呂島)

令和5年1月

福岡市

目次

I 計画策定にあたって.....	1
1. 計画の目的	
2. 計画の位置づけ	
3. 計画の対象地域	
4. 計画の期間	
II 玄界島	
1. 基本情報.....	2
2. 現状と課題.....	5
3. 将来像.....	6
4. 基本方針.....	6
5. 各分野における施策の方向性.....	7
①産業 ②雇用・就業 ③生活環境 ④医療 ⑤高齢者の福祉やその他の福祉	
⑥教育 ⑦防災 ⑧交通 ⑨情報・通信 ⑩自然環境 ⑪エネルギー	
⑫観光・地域間交流 ⑬地域文化 ⑭人材	
III 小呂島	
1. 基本情報.....	18
2. 現状と課題.....	21
3. 将来像.....	22
4. 基本方針.....	22
5. 各分野における施策の方向性.....	23
①産業 ②雇用・就業 ③生活環境 ④医療 ⑤高齢者の福祉やその他の福祉	
⑥教育 ⑦防災 ⑧交通 ⑨情報・通信 ⑩自然環境 ⑪エネルギー	
⑫観光・地域間交流 ⑬地域文化 ⑭人材	

I 計画策定にあたって

I 計画策定にあたって

1. 計画の目的

本計画は、玄界島と小呂島の自立的発展と住民による主体的な島づくりを促進し、住民の生活の安定と福祉の向上を図ることを目的としています。

2. 計画の位置づけ

本計画は、離島振興法の定めにより、市町村が作成し都道府県に提出することとなっている離島振興計画の案として位置づけます。

3. 計画の対象地域

本計画の対象地域は、福岡市において離島振興対策実施地域として指定されている玄界島と小呂島です。

4. 計画の期間

本計画の期間は、令和5年度から令和14年度までの10年間です。



II 玄界島

1. 基本情報

1) 概況

玄界島は、博多ふ頭から市営渡船で約 35 分（1 日 7 便）、航路距離約 18.5km、博多湾と玄界灘の境の、玄海国定公園区域内に位置しています。面積 1.16k m²、周囲 4.4km の円錐形の島で、遠見山（標高 218m）が島の最高峰です。島の南側に漁港、民家、公共施設などが集中しています。

人口は 353 人、世帯数は 167 世帯で、65 歳以上の比率は 49%、14 歳以下の比率は 7%となっています。（令和 2 年国勢調査）

水産業が島の基幹産業で、多くの島民が水産業関係に従事しており、福岡市の重要な拠点の一つとなっています。漁業種のは中心は、一本釣、刺網、はえ縄、小型定置網漁などで、サワラ、ブリ、フグ、ヒラメ、アワビ、サザエや加工したワカメ、さわらめしの素などが特産品です。

玄界島は平成 17（2005）年 3 月 20 日の福岡県西方沖地震により甚大な被害を受け、全島避難を余儀なくされました。しかし、島民が一体となり市と連携して復興に取り組んだ結果、「約 3 年間」という短期間で復興を遂げました。

2) 地域資源

①自然

- ・玄海国定公園
- ・大小の海食洞窟がある柱島
- ・大机島、小机島
- ・玄界灘の荒波に削られた美しい海岸
- ・ハヤブサやカラスバトなどの貴重な鳥類が生息
- ・市内で唯一のカラスバトの生息、繁殖地
- ・ハマオモト（ハマユウ）などの海浜植物の群落やタブ林は、環境省の特定植物群落として選定されている

②歴史・文化

- ・平安時代の百合若大臣伝説
- ・小鷹神社、若宮神社
- ・勤王志士の墓
- ・福岡県西方沖地震からの復興の歴史、行幸啓、震災復興記念公園

II 玄界島



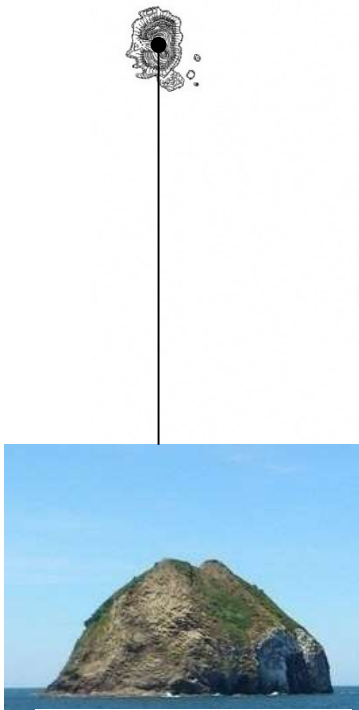
博多湾と玄界灘の境に浮かぶ島
ほぼ斜面地で南側に集落が集まる



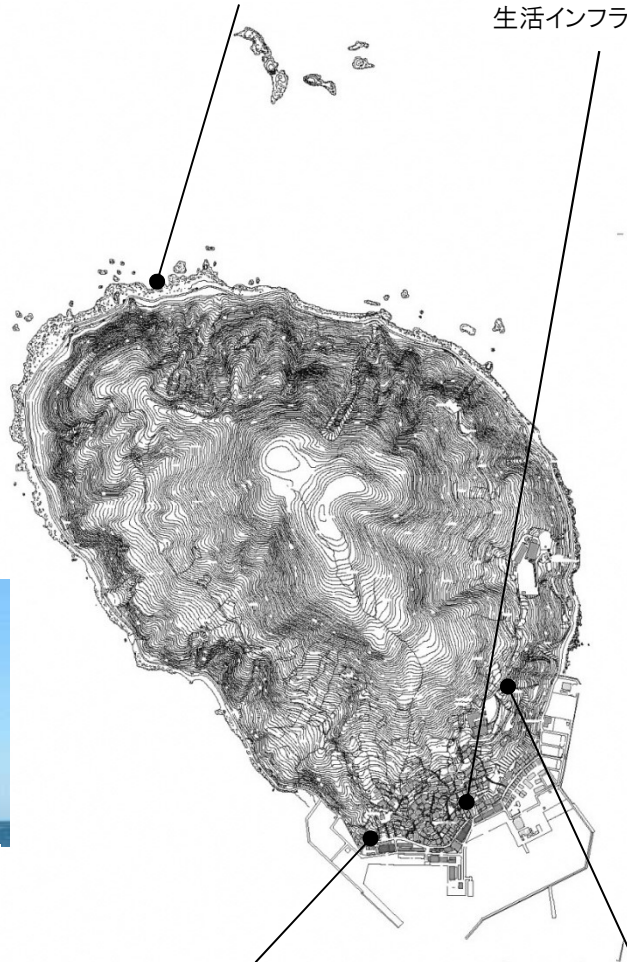
玄界灘に面した島北側の
海岸の美しい景観



玄界島の南側の集落
約3年で復興を遂げ
生活インフラが整備された



玄界島の北に浮かぶ柱島
大小の海食洞窟がある



玄界島の西方に浮かぶ机島
(大机島と小机島)



小鷹神社
百合若伝説にゆかりがある

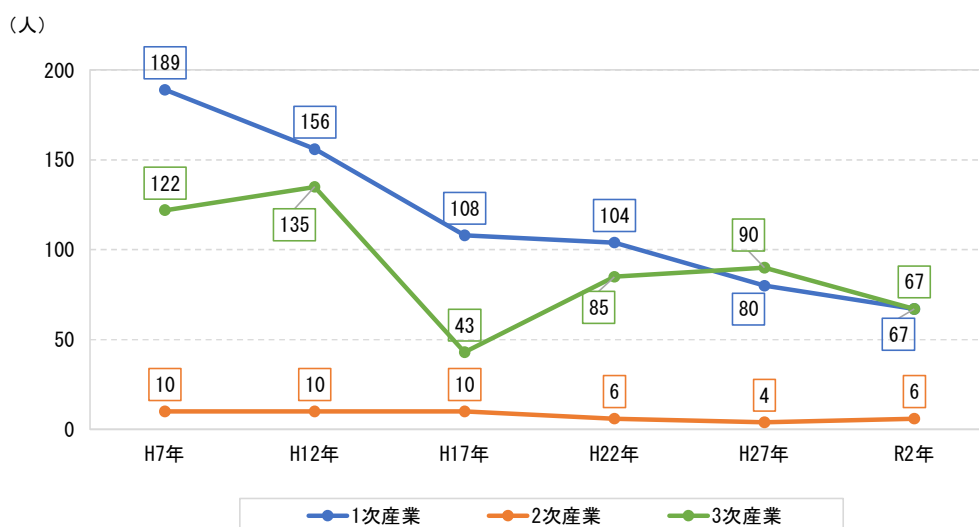


若宮神社
山と一体化したような神社

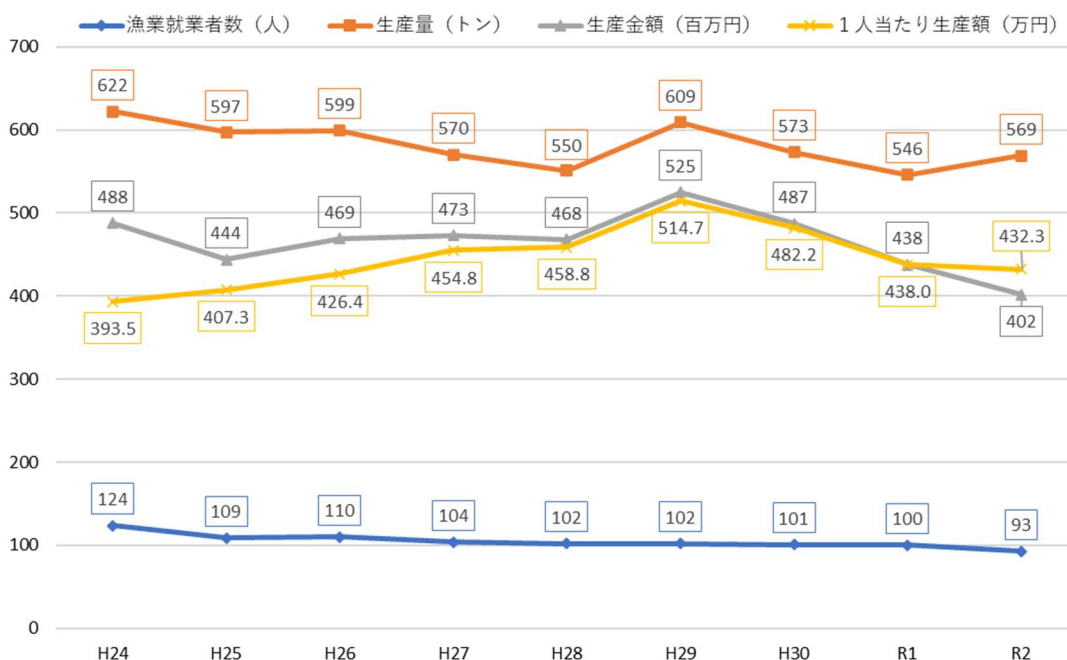
■人口・世帯数の推移(平成22年～令和2年)【国勢調査】

	平成22年		平成27年		令和2年		H22とR2の比較	
	実数	増減率	実数	増減率	実数	増減率	実数	増減率
世帯数	206		198		167		-39	-19%
人口総数	527		458		353		-174	-33%
14歳以下	54	10%	46	10%	25	7%	-29	-54%
15～64歳	319	61%	259	57%	153	43%	-166	-52%
65歳以上	154	29%	152	33%	172	49%	18	12%
年齢不詳	-	-	1	0%	3	1%	-	-

■就業者数の推移(平成22年～令和2年)【国勢調査】



■漁業就業者数・生産量・生産金額などの推移【福岡市統計書(年報)】



2. 現状と課題

玄界島は平成 17（2005）年 3 月の福岡県西方沖地震により甚大な被害を受けました。復興にあたっては、島民の基本方針として平成 20（2008）年に「玄界島復興プラン」がまとめられました。島民が一体となり市と連携して復興事業に取り組み、住宅や道路などが整備され、「約 3 年間」という異例の早さで復興を遂げました。そして、平成 21（2009）年には「玄界島島づくり推進協議会」を設立させ、島の周囲の遊覧船を出したり、港でのイベント開催など体験型観光を展開したり、ホームページを作り島の魅力を発信するなど、島民の主体的な賑わいづくりがなされました。

産業の復興としては、平成 19（2007）年から国の離島漁業再生支援交付金制度を活用したアワビの稚貝放流・養殖を実施するほか、平成 20（2008）年には天然わかめを塩蔵加工した特産品「玄界島特産天然生わかめ」を開発するなど、女性や高齢者の雇用にもつながっています。さらに、「さわらめしの素」など、新たな特産品を開発し、販路開拓を図っています。しかし、近年の魚価の低迷や燃料費の高騰などにより経営環境は厳しさを増しています。

島民がパートやアルバイトなどで市内へ通勤することは可能ですが、交通費と通勤時間を要し、悪天候時の欠航もあるため、年間を通じた安定した収入確保は容易ではありません。人口はこの 10 年間で約 170 人減少しており、高齢化率は 50%近くまで上昇し、高齢者の単身世帯・夫婦世帯が増加しました。少子高齢化、人口減少といった、震災前から玄界島が抱える課題の根本的な解決には至っていません。また、人材流出などが原因で、平成 26（2014）年に「玄界島島づくり推進協議会」は解散してしまいました。

観光については、玄界島の大部分が玄海国定公園の特別地域に指定されており、豊かな自然環境・美しい景観を有しているほか、新鮮な水産物など魅力的な観光資源があるものの、宿泊施設はなく、島外との交流が十分に図られていない状況です。

なお、島は水道や漁業集落排水処理施設など生活に必要な施設を整備し、適宜修繕・更新しており、多くの島民が「住みやすい」と感じています。しかし、今後も高齢化率が高まり、より一層医療や介護などの必要性が高まることが予想され、本土から離れた島特有の生活面での不安が残ります。

中長期的に人口の減少を防ぎ、島の活力を維持するためには、所得の向上や働きやすい環境づくりなど安定した漁業への取り組みを図り、将来の漁業生産を担う若くて意欲的な人材などを確保し、若い世代が島に住み続け子どもを育てることができるよう、生活の安定を確保する必要があります。

3. 将来像

島民の絆が安全・安心な暮らしを守り、産業に活気をもたらす島

4. 基本方針

将来像の実現のために、市は以下の 3 点を優先しながら、各分野で施策を進め、島づくりの主体である島民の活動を支援します。

(1) 産業の振興と雇用の創出

女性や若者の働く場が確保され、島民が経済的に安定した生活を続けることができるよう、特産品の加工・販売や、資源管理型漁業など、基幹産業である水産業の振興を支援します。また、特産品の販路拡大や交流人口の増加につながる情報発信を支援します。

(2) 島民の絆と支え合いによる安全・安心

復興の原動力となった、島民の絆と支え合いを基盤として、豊かな自然環境や伝統文化が将来に受け継がれ、子どもから高齢者まで安全・安心な暮らしが持続するよう、コミュニティの活動を支援します。

(3) 活動の主体となる人材の育成

産業の振興やコミュニティの活動など、関係人口を巻き込みながら、島の振興の主体となる人材づくりやリーダーの育成と、島全体で活動を推進していくための体制づくりを支援します。

5. 各分野における施策の方向性

分野	現状と課題	住民の意識・意見	施策の方向性
1 産業	<ul style="list-style-type: none"> 生産量は安定しているものの、魚価の低迷により生産額が減少している。 H27 から小型定置網漁を漁協の自営事業として開始し、生産力の向上を図った。 漁師の担い手不足、高齢化が進んでいる。 天然ワカメは島の特産品に成長した。R3 にはさわらめしの素を開発するなど、加工品開発やブランド化を進めている。 	<ul style="list-style-type: none"> 若い人が少なく、高齢化が進み、かつ漁業をする人自体が減少している。 漁獲量が年々減少し、藻場も減ってきている。 定置網の作業員不足を解消する為、外部からの雇用が必要である。 	<ul style="list-style-type: none"> アカウニ、トラフグ、メバルの種苗の放流や、魚礁の設置など、引続き資源管理型漁業を推進する。 特産品の販路拡大や新たな加工品の開発支援に引き続き取り組むとともに、島のブランディングや知名度の向上を図る。 新たな担い手や収入確保のため、養殖などの生産手法の検討を行う。
2 雇用・就業	<ul style="list-style-type: none"> H27 の小型定置網の導入や、R3 のサワラを活用した新たな商品開発を行うなど、新たな雇用を生んでいる。 	<ul style="list-style-type: none"> 島内では、漁師以外の仕事の選択肢は限られている。 季節労働や短期間の雇用ならある。 島外から来る人の雇用を考えるが、住む場所を準備しなければならない。 漁業、公共サービス、医療・福祉従事者など、島で生活する上で必要不可欠な職業の人が住みやすい環境を作りたい。 	<ul style="list-style-type: none"> 水産物を活用した新商品の開発と既存のワカメやさわらめしの素の販路拡大で雇用創出を図る。 不漁や魚価安などの損失が補填される漁業共済制度の掛金への助成や新規就業者への必要経費への助成など支援を行う。 玄界島復興事業で整備した宅地を、将来的な定住者の受け皿としての利活用が可能か島民と市で検討する。

分野	現状と課題	住民の意識・意見	施策の方向性
<p>3 生活環境</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 漁業集落排水処理施設の劣化状況を調査し、機械・電気設備機器類の更新を実施するなど、生活する上でのインフラ環境は整っている。 ・ 公営住宅には空室もあるが、収入基準などの入居要件がある。 ・ 漁業、公共サービス、医療・福祉従事者など、島で生活する上で必要不可欠な職業の人や移住者などを受け入れる住宅がない。 ・ ごみ処理について、可燃ごみは焼却場にて処理している。 ・ 不燃ごみや粗大ごみは収集保管場所に一時保管し、年4回本土へ移送処理している。 ・ 鳥獣被害防止としてH27より侵入防止策の導入設置を支援（R元、R2追加設置支援）。 ・ R元に捕獲従事者への報奨金を上乘せし、狩猟免許費用等助成（R2狩猟免許更新費用にも助成拡充）。 ・ R4イノシシの行動監視用センサーカメラを貸与。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 上水道・漁業集落排水に関しては問題ない。 ・ 食料品の買い出しについては、漁業協同組合の購買店があるため助かっている。 ・ 一般ごみは、週2回ごみ出し日がある。 ・ 漁業、公共サービス、医療・福祉従事者など、島で生活する上で必要不可欠な人が居住しやすい環境を作って欲しい。 ・ 公営住宅に空室がある。 ・ 公営住宅の入居要件を緩和して欲しい。 ・ 一時期、罾を置いたおかげかイノシシが減ったが、罾の数を減らしたら、また増えてきたようだ。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 関係機関などと連携して、島民による移住希望者の受け入れ体制等の検討支援を行う。（生活のルールづくりや、住宅の確保） ・ 漁村向市営住宅などの利活用について、漁協などと調整のうえ、国と協議を行う。 ・ 関係機関と連携し、捕獲従事者の活動支援などを行い、イノシシによる被害防止に努める。

分野	現状と課題	住民の意識・意見	施策の方向性
<p>4 医療</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・常駐医師1名 ・看護師2名 ・歯科週3回渡島診療 ・常駐医については、医師不足の中、指定管理者において確保し交替により派遣するなど、苦慮している。 ・消防局ヘリ、消防艇、福岡県ドクターヘリ、海上保安庁ヘリ、福岡県警ヘリ、市営渡船、港湾局船舶緊急借上げなど多様な救急搬送方法を確保している。 ・H27より離島に居住する妊婦の健康診査などの支援費の補助金支給。 	<ul style="list-style-type: none"> ・毎日交代で、診療所に医者が来島。 ・専門医がいない。 ・診療時間外に病人や怪我人が出た場合は、船で本土へと連れて行っている。 ・緊急時は消防ヘリで本土へ連れて行く。 ・リモートで受診できる環境が欲しい。 ・子どもが小さいと今すぐ病院に連れて行くべきなのか、一晩待ってもいいのか判断がつかないので、夜でも対応できるようにして欲しい。 	<ul style="list-style-type: none"> ・予防の意識を高く持ち、健康診断の受診や健康講座の受講など健康増進・疾病予防の行動を支援する。 ・今後も指定管理者などと連携し、常駐医の継続に努める。 ・専門医との連携実施について指定管理者と検討していく。 ・消防ヘリ、消防艇などの活用や本土の医療機関との連携を密にすることにより、救急医療体制の強化を図るとともに、遠隔医療を活用するなど住民の医療に対する不安解消に努める。 ・夜間の急病人について常駐医や看護師（玄界島在住）での対応に努める。 ・天候・発生時刻などの条件に対し、より良い搬送方法を選定する。

分野	現状と課題	住民の意識・意見	施策の方向性
<p>5 高齢者の福祉やその他の福祉</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・H22年に開設した小規模多機能型居宅介護事業所「ケアポート がんぎだん」や「いこいの家」に高齢者が集まり、友人との語らいを楽しんでいる。 ・健康関連の公民館講座により、介護予防を進めている。 ・島内の居宅要介護など被保険者への訪問系居宅サービスを提供するため島外の指定居宅サービスなど事業者への交通費の助成を実施。高齢化率が約50%(R2の国勢調査)であり、介護需要は高まっている。 ・保育園の入所児童が年々減少している。 	<ul style="list-style-type: none"> ・がんぎだんという介護施設が島内にあり、入居もできる。 ・玄界老人いこいの家という施設もあり、高齢者が何人かで集まって、ディスコンやお茶会を行っている。 ・島内の幼児数も5人に減ってしまっている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・年齢を重ねても元気で生き生きとした生活が送れるよう、介護予防事業に取り組む。 ・介護保険サービス提供時における事業者への交通費助成を今後とも継続して行っていく。 ・保育が必要な児童に対して、引き続き保育を提供する。

分野	現状と課題	住民の意識・意見	施策の方向性
<p>6 教育</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・教諭の定数措置により複式学級解消や教育相談コーディネーターを配置するなど教育環境の充実を図っている。 ・1人1台端末を使用し、調べ学習や動画コンテンツなどを使った学習を行ったり、福岡市内外の学校などとオンラインでつないで合同授業を実施するなど、学習機会を確保している。 ・小・中の児童生徒数が減少傾向にあるため、島外から児童生徒を受け入れる検討をしている。 ・本土に寄宿している島出身の高校生に住居費を補助している。 	<ul style="list-style-type: none"> ・島内に若年者が少なく、子どもが増えない。 ・ウニ取り体験や釣り、山登りなど島だからこそできることをPRして、子どもたちを受け入れたい。 	<ul style="list-style-type: none"> ・島民と学校が連携し、島の魅力をいかした教育課程や、島外からの児童生徒を受け入れる環境の構築を検討していく。 ・地域に伝わる伝統文化などの学習を積極的に取り入れ、特色ある学校づくりを推進する。

分野	現状と課題	住民の意識・意見	施策の方向性
7 防災	<ul style="list-style-type: none"> ・デジタル式の防災行政無線などを整備し、有線が断たれた際の通信手段を確保。 ・災害時の停電対策として、防災倉庫に小型発電機を配備するとともに、避難所となる公民館へEVなどから給電するための設備を整備している。 ・H29 津波ハザードマップを作成。 ・毎年 3/20 に防災訓練を実施しているが有時における島民同士の連絡網はなく迅速な情報伝達の仕組みが脆弱。 ・女性自衛消防隊防火クラブは、漁で男性が不在となる時間帯に島の防災を担ってきたが、R元年に解散。R4 現在、玄界水上分団には女性2名が在籍している。消防団員の確保を含めて初期の消火活動の体制づくりが求められる。 ・高齢者など要配慮者の支援体制は確立していない。 ・避難所の備蓄食糧が不足しており、緊急時の備えが十分とは言えない。 	<ul style="list-style-type: none"> ・島内ではオール電化住宅も多いため、緊急時は電力の復旧、確保が重要。 ・以前は、台風の前に九電の人が常駐してくれていたが、今はしていない。 ・自給設備として、防災拠点が賄える程度の発電設備が必要。 ・非常時における島民同士の連絡網はない。 ・避難する際に補助が必要な高齢者は把握しているが、誰が誰を補助するか、などの支援体制は決めていない。 ・女性自衛消防隊は「仕事との両立が難しい」などで解散している。 ・ハード面として、避難所の備蓄食糧が足りていない。 ・災害マニュアルが必要。 	<ul style="list-style-type: none"> ・離島の災害対策として、関係機関・局・区が連携し、物資・人員の輸送手段の検討、避難所の機能強化、各種防災計画の整理・拡充を図る。 ・災害時の停電対策について、公民館に整備した給電設備を円滑に活用できるよう運用を図る。 ・災害時における島民の迅速な避難行動や、防災訓練実施の支援に努める。 ・避難に支援が必要な高齢者などを把握し、実際の支援体制を、関係機関と連携して検討する。 ・避難所における備蓄食糧の拡充について検討する。

分野	現状と課題	住民の意識・意見	施策の方向性
<p>8 交通</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・渡船施設の経年劣化に伴う補修費の増加、昨今の社会情勢による船舶燃料の高騰など経常収支状況はますます悪化している。 ・市営渡船の欠航により、人の移動や物資の輸送に支障が生じている。 ・離島航路補助金（国・県）の確保に向けた健全な経営が求められる。人の運賃同様、物資の輸送コストもかかることから、食品や灯油などの生活必需品も割高となっている。 ・船舶のバリアフリー化を実施した。 (H27 みどり丸 R元 ゆうなみ) 	<ul style="list-style-type: none"> ・気象状況やエンジントラブルで欠航が多い。 ・定期船と本土の西鉄バスの接続が悪い。 ・渡船による輸送コストがかかり、物価が高い。 ・通販などで買った荷物は船着き場までしか持って来てくれない。 ・マイカーは車検代が非常に高くつくほか、保管場所の確保など維持管理の負担が大きいため、カーシェアリングのような島内の移動や荷物搬送手段があるとよい。 	<ul style="list-style-type: none"> ・安全管理規定を遵守し、安全運航に努めていく。 ・本土側交通事業者（西鉄バス）に対し、定期便との円滑な接続を要望していく。 ・生活必需品の輸送や島民の利便性向上及び生活に係るコスト軽減のため、無人航空機（ドローン）や自動配送ロボット、カーシェアリングシステムなどを活用した、島までの物資輸送や島内での荷物配送などを関係機関と連携して研究する。 ・玄界島航路は国庫補助航路に指定され、国・県から健全経営が求められる中、島民人口の減少や高齢化により利用者が減少するなど厳しい状況にあるが、今後も地元の需要動向にあわせて、国・県との協議を図る。

分野	現状と課題	住民の意識・意見	施策の方向性
9 情報・通信	<ul style="list-style-type: none"> ・光回線は整備されていないが、無線の高速通信であるLTE回線が整備されており、インターネット接続は可能な状況にある。 	<ul style="list-style-type: none"> ・光回線は事業費が高いと聞いている。 ・光回線について、今後、島としてもお願いしていくべき。 	<ul style="list-style-type: none"> ・新たなサービスも含めた情報通信サービスに関する情報収集を行うとともに、その動向や島の実情を見ながら、今後検討を行っていく。
10 自然環境	<ul style="list-style-type: none"> ・漂着ごみは除去しても繰り返し漂着し、島外への運搬処理費も大きな負担となっている。 ・大雨による山崩れや土砂流出など自然災害が起こっている。 ・近年、異常気象で災害が頻発する状況にあり、自然災害への対策が不可欠である。 ・ハマオモト(ハマユウ)などの海浜植物の群落やタブ林は、環境省の特定植物群落として選定されている。 ・ハヤブサやカラスバトなどの貴重な鳥類が生息している。 ・島の大部分が玄海国定公園の特別地域に指定されているが、この自然環境を活かした島外との交流の活動がない。 	<ul style="list-style-type: none"> ・漂着ごみの処理で困っている為、島内に焼却場が欲しい。 ・漂着ごみは、国、県、市で補助を出すか、回収して欲しい。 ・島の周回通路での土砂災害が多く、事前に危ない箇所を伝えているが、なかなか対処してもらえない。 ・ボランティア団体による漂着ごみの回収活動が、島民や島外の人を巻き込んで行われている。 ・遠見山の登山道の案内板設置や、島の資源マップ作成など、小学生が地域文化を学習し、情報発信をしている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・関係機関と連携し、不法投棄や漂着ごみなどの処理について対応策を検討していく。 ・島の周回通路の土砂災害防止対策について関係機関と協議を行う。 ・自然体験などを活用した来訪者との交流を関係機関と連携して検討していく

分野	現状と課題	住民の意識・意見	施策の方向性
11 エネルギー	<ul style="list-style-type: none"> ・太陽光発電などの再生可能エネルギーの活用が期待される。 	<ul style="list-style-type: none"> ・電気は海底ケーブルに接続されているので便利がよい。 ・ガスは集合施設があり、利用している各家庭に送られている。 ・輸送コストもかかるため、ガソリン代が高い。 ・非常時を考えると、エネルギーの自給ができるとよい。 	<ul style="list-style-type: none"> ・太陽光発電を中心とした再生可能エネルギーの導入の推進を図る。

分野	現状と課題	住民の意識・意見	施策の方向性
<p>12 観光 ／ 地域 間 交流</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・島づくり推進協議会の設立当初は、遊覧船による島外周遊や、港でのイベント開催など体験型観光を展開するほか、島のホームページで島の魅力を発信していた。 ・食事処や宿もなく、観光客が長く滞在できない。 ・島の観光についてのルールも特になく、一部にはマナーの悪い観光客がいる。 ・島の観光ガイドがない。 ・震災後の復興のまちづくりを学ぼうと、今でも視察が来ているため、受け入れ体制の充実と継続が求められる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・近年、釣り客が増加している。 ・遠見山への登山、島巡り、猫の写真撮影を目的にする観光客もいる。 ・春と夏は釣り客が多いが、宿がないため、テントで寝泊まりする人もいる。 ・公共トイレが少なく、島の外周を散策中、トイレが必要な時に困る。 ・ごみ問題や立ち入り禁止区域への侵入など観光客のマナーが悪い。 ・静かな環境を求める住民もいるので、観光マナーを作るべき。 ・ルールを守るならば、観光客の受入れは賛成。 ・自転車やジョギングで島を1周するなどの観光ができるとよい。 ・観光ガイドの問い合わせはあるが、ガイドがない。 	<ul style="list-style-type: none"> ・地域の意見を踏まえながら、観光資源の洗い出しや情報発信、民間事業者のマッチングなどを図る。 ・インターネットやSNSなどによる迅速で楽しい観光情報の発信を支援する。

分野	現状と課題	住民の意識・意見	施策の方向性
13 地域文化	<ul style="list-style-type: none"> ・福岡県西方沖地震からの復興の歴史について今でも視察が来ており、広く語り継がれる島の文化となっている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・小鷹神社にまつわる百合若伝説が島内にある。 	<ul style="list-style-type: none"> ・地域に伝わる伝統文化などを伝承していくことの必要性について意識の共有化を図る。
14 人材	<ul style="list-style-type: none"> ・H21年に設立した「玄界島島づくり推進協議会」はH26年に解散した。 ・少子高齢化のため、島外からの移住者を募集すべきという意見が大半である。 ・地域づくりの担い手として地域おこし協力隊に期待する声がある。 	<ul style="list-style-type: none"> ・島の人口が減少しているため、島外から移住者を増やすような情報発信が必要。 ・島外からの移住者を増やすための取り組みが必要。 ・魅力があっても住める環境が完備されていないと人が増えないので、環境の整備をして欲しい。 ・地域おこし協力隊は「産業振興ができる人」や「島をPRできる人」など、島の振興に携わって欲しい。 	<ul style="list-style-type: none"> ・地域おこし協力隊の活用及びその受け入れ体制構築を、関係局や島の関係者などと連携して検討する。 ・島民の主体的な島の活性化に向けた取り組みを推進する「玄界島島づくり推進協議会」の再結成を支援する。

Ⅲ 小呂島

1. 基本情報

1) 概況

小呂島は、筑前諸島地域の中で唯一の孤立小型離島です。西区姪浜から市営渡船で65分(1日1~2便)、航路距離40.7kmの玄界灘の中央に位置しています。

面積0.43k m²、周囲3.4kmの玄武岩を基盤とした島で、宮山(標高109m)が島の最高峰で、嶽宮神社が位置します。島の周囲は玄武岩の断崖絶壁で、一部に海蝕洞がみられます。島の南側に漁港、民家、公共施設などが集中しています。

人口は158人、世帯数は63世帯で、65歳以上の比率は27%、14歳以下の比率は13%となっています。(令和2(2020)年国勢調査)

基幹産業は水産業で、多くの島民が水産業関係に従事しています。玄界灘の漁場に近く、福岡市の重要な水産業の拠点の一つとなっています。主要漁業種は「まき網漁業」で、島内のほとんどの漁家が参加する共同経営方式を採用していることが特徴です。主にブリ、イサキ、ヒラメなどが採れ、ブリをフレークにした「小呂島漁師のしまごはん」やブリカマやブリの漬け、ブリめしなど、製造及び販売を行っています。

平成23(2011)年に「小呂島しまづくり協議会」を立ち上げ、「小呂島しまづくり計画」を策定し、島民が一丸となって島づくりに取り組んでいます。

2) 地域資源

①自然

- ・玄武岩の独特の島の姿
- ・島の北側に広がる草地
- ・小呂島が県内唯一の自生地である希少植物クロバナイヨカズラ
- ・ハチジョウススキ群落や嶽宮神社の照葉樹林は、環境省の特定植物群落として選定されている
- ・ハヤブサなどの貴重な鳥類が生息、野鳥や渡り鳥の観察のポイント
- ・イガイゼ(貽貝瀬)、ビシャゴーゼなど、島の各所に先人の思いが伝わる呼称がついており、自然と一体となった生活文化がある

②歴史・文化

- ・中世 謝国明が所有、宗像氏の領地となる
- ・近世 福岡藩領地拡張のため西浦の漁民が移住する
- ・近世 儒者貝原益軒流島される

Ⅲ 小呂島

- ・ たびたびの異国船来訪
- ・ 昭和 10 年頃に旧日本軍が駐留、旧海軍望楼跡などが残っている
- ・ 嶽宮神社、七社神社、薬師堂、恵比寿様などの多くの神社がある
- ・ 初詣、船参り、山笠、万年願、おくんちなどの多くの行事・祭りがある



玄界灘に浮かぶ緑豊かな島
玄武岩の独特な島の姿



砲台跡、弾薬庫、望楼など
の旧日本軍の戦時遺構



嶽宮神社周辺の原始林
神殿の周囲のものは一切持ち
出してはいけない禁忌がある



嶽宮神社 標高 109m
島の最高峰にある神社



小呂島の氏神、産土神である
七社神社 山笠の舞台



まき網漁は島の漁師が
皆で船団を組み行う



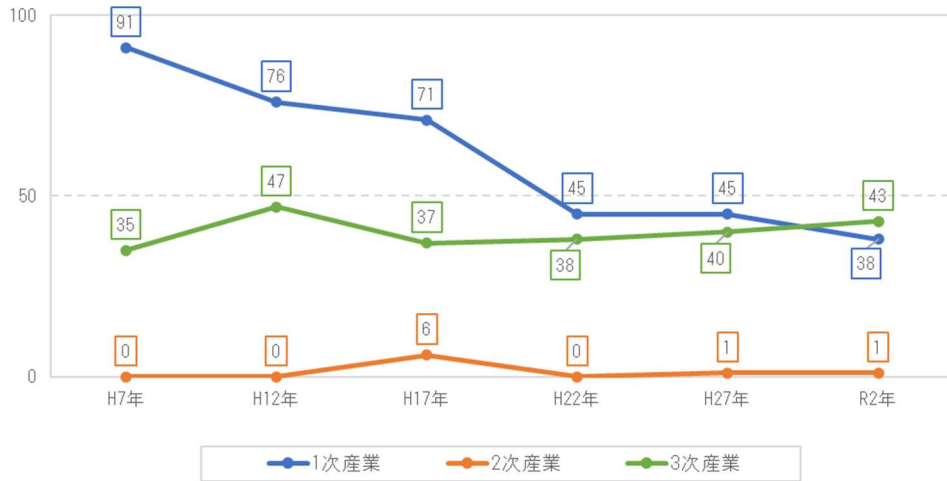
7月15日に行われる山笠
朝夕の2回練り歩く

■人口・世帯数の推移(平成22年～令和2年)【国勢調査】

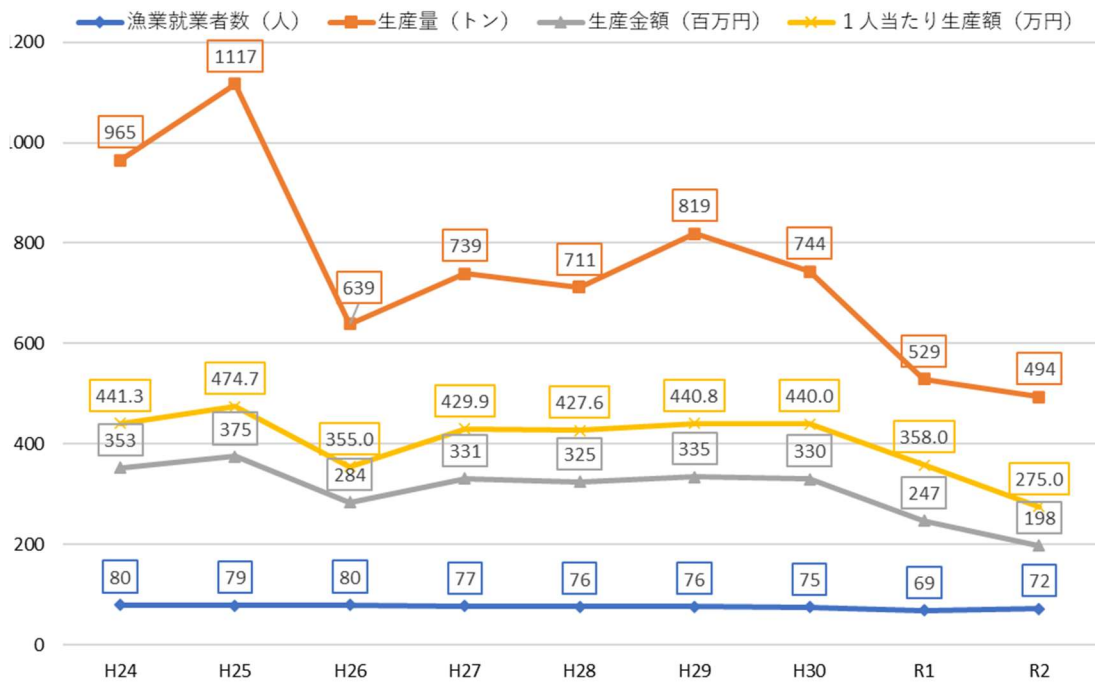
	平成22年		平成27年		令和2年		H22とR2の比較	
	実数	増減率	実数	増減率	実数	増減率	実数	増減率
世帯数	61		64		63		2	3%
人口総数	189		192		158		-31	-16%
14歳以下	23	12%	28	15%	20	13%	-3	-13%
15～64歳	126	67%	125	65%	95	60%	-31	-25%
65歳以上	40	21%	36	19%	43	27%	3	8%
年齢不詳	-	-	3	1%	-	-	-	-

■就業者数の推移(平成22年～令和2年)【国勢調査】

(人)



■漁業就業者数・生産量・生産金額などの推移【福岡市統計書(年報)】



2. 現状と課題

小呂島の基幹産業は漁業であり、5月～12月の「まき網漁業」と1月～4月の「刺網」の2つの漁業種で、生産量・生産金額の約9割を占めています。主要漁業の「まき網漁業」は、島内のほとんどの漁家が参加する共同経営方式で行われているほか、海士に従事している女性が多いことも特徴です。

しかし、近年の魚価の低迷や燃料費の高騰などにより経営環境が悪化し、収入が不安定となっています。パートやアルバイトなど働く場を求めて本土へ通勤することは、市営渡船の運賃や便数、航行時間を鑑みると現実的ではなく、収入を補う手段としては考えにくいもので、安定した収入が得られるような仕事の創出、就業は課題です。

そのような中、平成23(2011)年には島民自らが課題や将来目指すべき姿を議論して「小呂島しまづくり計画」を策定し、魚介類のブランド化や特産品開発、島の魅力のPRに島をあげて取り組んでいます。平成24(2012)年から6次産業化の取組みとして、ブリの焼きほぐし（フレーク状に加工したもの）を「小呂島漁師のしまごはん」として開発し、百貨店などで販売展開しており、平成28(2016)年度からは学校給食にも提供しています。地元産の漁獲物を用いた6次産業化を進めることで島の女性の活躍の場が広がり、また、YouTube配信やインスタグラムなどSNSを活用して小呂島の魅力を発信し、島の活性化へ挑戦しつづけています。

また観光については、玄武岩の独特な島の姿や、旧海軍望楼跡、山笠やおくんちなどの多くの行事・祭りがあり、特色ある景観、文化・歴史的資源、新鮮な水産物など魅力的な観光資源があるものの、これらを活かした食事処や宿泊施設などはなく、島外との交流が十分に図られていない状況です。

一方、一時期は微増傾向にあった人口は再度減少をはじめており、少子高齢化や人口減少などの課題を抱えています。特に、15～64歳生産年齢人口が減るなど漁師の高齢化や、若い漁師が島を離れる状況にあり、これまで、集団で漁業を行う「まき網漁業」を2ヶ統で行っていましたが、1ヶ統しか編成できない状況になっており、今後の漁獲量への影響が懸念されています。

なお、島は水道や漁業集落排水処理施設など生活に必要な施設を整備し、適宜修繕・更新しており、多くの島民が「住みやすい」と感じています。しかし、医療や福祉、物価など、本土から離れた島特有の生活面での不安が残ります。

中長期的に人口の減少を防ぎ、島の活力を維持するためには、所得の向上や働きやすい環境づくりなど安定した漁業への取組みを図り、将来の漁業生産を担う若い意欲的な人材などを確保し、若い世代が島に住み続け子どもを育てることができるよう、生活の安定を確保する必要があります。

3. 将来像

島民が団結して水産業を基盤とした島づくり・人づくりを進める島

4. 基本方針

将来像の実現のために、市は以下の3点を優先しながら、各分野で施策を進め、島づくりの主体である島民の活動を支援します。

(1) 持続可能な水産業の推進と小呂島ブランドの向上

島民の働く場が確保され、島民が経済的に安定した生活を続けることができるよう、持続可能な水産業の推進と特産品の加工・販売など6次産業化による付加価値の向上を支援します。

(2) 島民の団結と支え合いによる暮らしの安心

島民の団結が維持され、島民が支え合いながら安心して島で暮らし続けることができるよう、コミュニティの活性化と福祉の向上を支援します。

(3) 人材育成と情報発信による島の資源の継承

豊かな自然や歴史・文化といった島の資源が次世代に継承されるよう、関係人口を巻き込みながら、島全体で活動を推進していくための体制づくりを推進し、将来の島づくりの主体となる若い人材の育成と、島の知名度の向上や島外との交流の拡大などにつながる情報発信を支援します。

5. 各分野における施策の方向性

分野	現状と課題	住民の意識・意見	施策の方向性
1 産業	<ul style="list-style-type: none"> ・漁獲量の減少や魚価の低迷により収入が減少している。 ・漁師の担い手不足、高齢化が進んでいる。 ・高水温と食害により藻場が減少。現在藻場の復活に向け藻場造成などの対策を行っている。 ・小呂島で開発した「しまごはん」を国内のイベントや商談会への参加、大手デパートでの販売などでPRを行い、ブランド化や販路拡大が進んでいる。 ・また、学校給食に「しまごはん」の提供を行っている。 ・さらに瞬間冷凍したブリなどのフィレ加工品を新たに開発中である。 ・出荷調整生簀や瞬間凍結機を導入して、販売量をコントロールし、安定した出荷を図っている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・漁獲量の減少、魚価の低迷で収入減。 ・収入が少ないので、漁師を勧められない。 ・担い手がおらず、人手不足と高齢化が進んでいる。 ・島外から漁師を迎えようとしても、空き家もなく、住む場所がない。 ・「しまごはん」や新商品の需要が増えれば、加工場の仕事が増えるが、見通しはたっていない。 ・漁師以外で生計をたてられるほどの仕事が少ない。 	<ul style="list-style-type: none"> ・主力のまき網漁を補完する新たな漁法の導入などに向けた検討・支援に取り組むとともに、藻場造成などにも引き続き取り組む。 ・特産品の販路拡大や新たな加工品の開発支援に引き続き取り組むとともに、島のブランディングや知名度の向上を図る。

分野	現状と課題	住民の意識・意見	施策の方向性
2 雇用・就業	<ul style="list-style-type: none"> ・漁獲量の減少や魚価の低迷などの影響により所得が下がっている。 ・高齢化や若い漁師の島離れが進んでいる。 ・島内では、漁師以外の仕事の選択肢が限られている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・10年前に比べると雇用は増えたが、若い世代全てを賄えるほどではなく、就職と共に島外へと出ていく。 ・6次産業化に取り組んではいるが、軌道にはのっていない。 ・観光化にも取り組む予定であり、色々な産業が出来て欲しい。 ・新規雇用を受け入れる為には、住む場所の準備が必要。 	<ul style="list-style-type: none"> ・主力のまき網漁を補完する新たな漁法の導入などに向けた検討などの支援を行う。 ・特産品の販路拡大や新たな加工品の開発への支援を行う。 ・不漁や魚価安などの損失が補填される漁業共済制度の掛金への助成や新規就業者への必要経費への助成など支援を行う。

分野	現状と課題	住民の意識・意見	施策の方向性
<p>3 生活環境</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・水道、漁業集落排水処理施設など生活に必要な施設は整備を行い、適宜修繕・更新している。 ・可燃ごみは年 6 回本土へ移送処理（厨芥類は島内処理施設で分解処理） ・不燃ごみ・粗大ごみは年 3 回本土へ移送処理 ・公営住宅に空室もあるが、収入基準などの入居要件がある。 ・移住者などを受け入れる住宅がない。 	<ul style="list-style-type: none"> ・上水道・漁業集落排水に関しては、問題ない。 ・収集したごみは、漁協青壮年部で福岡本土まで運送しているが、今後高齢化によりできなくなる。 ・ごみを収集保管場所まで運ぶことが、高齢になると大変になった。 ・ごみの収集保管場所は老朽化が進み、利便性が低い。 ・ごみを運搬する日まで纏めて置く設備が欲しい。 ・民間賃貸物件がなく、小呂島に移住したい人や地域活性化に取り組む人向けの住居を整えるべき。 ・漁師が入居できる空き住居は1～2軒あるが、誰でも入れるアパートが欲しい。 	<ul style="list-style-type: none"> ・R5-6 簡易水道海水淡水化システムを更新する。 ・ごみの本土への移送を、安定的に継続できるように取り組む。 ・関係機関などと連携して、島民による移住希望者の受け入れ体制等の検討支援を行う。（生活のルールづくりや住宅の確保） ・漁村向市営住宅などの利活用について、漁協などと調整のうえ、国と協議を行う。

分野	現状と課題	住民の意識・意見	施策の方向性
4 医療	<ul style="list-style-type: none"> ・島の診療所に看護師が1名常駐しているが、医師は常駐していない。月1回渡島し、診療を行っている。 ・消防局ヘリ、消防艇、福岡県ドクターヘリ、海上保安庁ヘリ、福岡県警ヘリ、市営渡船、港湾局船舶緊急借上げなど多様な救急搬送方法を確保している。 ・H27より離島に居住する妊婦の健康診査などの支援費の補助金支給。 	<ul style="list-style-type: none"> ・診療所はあるが、看護師が1人いるだけで医者はいない。急患の時はヘリコプターで、福岡の病院まで搬送しているが、常駐の医師がいて欲しい。 ・医者の常勤が無理ならば、病院に行った時の定期船代の割引をして欲しい。 ・常駐の医師がいないため、島民は本土の医療機関に受診している。高齢になり通院が欠かせないため、渡航費や宿泊代がかかり、島民個人の経済的負担が大きくなっている。 ・決まった薬であれば、本土に取りにいかずとも、オンラインで受診後、島で薬を受け取れるようにして欲しい。 	<ul style="list-style-type: none"> ・予防の意識を高く持ち、健康診断の受診や健康講座の受講など健康増進・疾病予防の行動を支援する。 ・月1回の渡島診療時に委託歯科医師派遣を継続する。 ・消防ヘリ、消防艇などの活用や本土の医療機関との連携を密にすることにより、救急医療体制の強化を図るとともに、遠隔医療を活用するなど住民の医療に対する不安の解消に努める。 ・天候・発生時刻などの条件に対し、より良い搬送方法を選定する。

分野	現状と課題	住民の意識・意見	施策の方向性
<p>5 高齢者の福祉やその他の福祉</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・支援が必要な高齢者はいるが、島内に介護保険事業所は無く、島民のサービス利用が住宅改修や福祉用具レンタルにとどまっている。 ・訪問・通所型のサービスについては、船による往復時間や運行状況がネックとなり、介護が必要になると、島で在宅サービスを受けながら生活することが難しい。乗船代の助成をしているが、提供が乏しい状況である。 ・島民をサポーターとして養成し、介護予防サロン（いきいきサロン）を実施している。 ・公民館講座や介護予防サロンなどにより、健康づくり、介護予防の取組みを進めている。 ・保育士の担い手が不足している。 	<ul style="list-style-type: none"> ・医者もヘルパーもいないので家で介護は無理。基本的には地域でお互いを見守り合っている状況。 ・週に1回、水曜日に「いきいきサロン」というものがあり、6名の高齢者が通っている。 ・介護保険施設がないため、必要となれば本土の施設に入所させている。 ・保育士の確保が非常に難しい。 	<ul style="list-style-type: none"> ・年齢を重ねても元気で生き生きとした生活が送れるよう、介護予防事業に取り組む。 ・介護保険サービス提供時における事業者への交通費助成を今後とも継続して行っていく。 ・保育士の安定的確保に向けて取り組んでいく。

分野	現状と課題	住民の意識・意見	施策の方向性
6 教育	<ul style="list-style-type: none"> ・教諭の定数措置により複式学級解消や教育相談コーディネーターを配置するなど教育環境の充実を図っている。 ・1人1台端末を使用し、調べ学習や動画コンテンツなどを使った学習を行ったり、福岡市内外の学校などとオンラインでつないで合同授業を実施するなど、学習機会を確保している。 ・小・中の児童生徒数が減少傾向にあるため、多数で行う授業ができにくい。 ・本土に寄宿している島出身の高校生に住居費を補助している。 	<ul style="list-style-type: none"> ・島内に保育園、小中学校はあるが、高校がないため、高校生になると島を離れて寮・下宿生活となり、金銭的に負荷が大きい。 ・生徒数に比べ、先生の数が多いため、そういった点からは教育環境は良いと思う。 ・子どもが少なく、多数で行う授業がやりにくくなっている。 ・都市部の生徒との交流の機会を増やして欲しい。 ・教員宿舎が老朽化しているので建替えて欲しい。 	<ul style="list-style-type: none"> ・「やさしさとたくましさを持ち、自己や小呂島を誇りに思い、ともに学び未来を創り出す子どもの育成を図る」という教育目標を学校と島民が共有し、様々な形で大人が関わりながら、望ましい教育環境を構築する。 ・地域に伝わる伝統文化などの学習を積極的に取り入れ、特色ある学校づくりを推進する。

分野	現状と課題	住民の意識・意見	施策の方向性
7 防災	<ul style="list-style-type: none"> ・デジタル式の防災行政無線などを整備し、災害で有線が断たれた際の通信手段を確保。 ・災害時の停電対策として、防災倉庫に小型発電機を配備するとともに、避難所となる公民館へEVなどから給電するための設備を整備している。 ・H29 津波ハザードマップを作成。 ・高齢者など要配慮者の把握と支援対策を備えることは必要である。 ・防災訓練をしていない。 ・船の欠航などにより、避難所運営職員を派遣できないことがある。 	<ul style="list-style-type: none"> ・火事に対する危機感が高いので、今まで島民で火災を理由に亡くなった人はいない。 ・緊急時における島民同士の連絡網がない。 ・台風の時などの独居老人の見守りが必要。 ・防災訓練はやっていない。 ・公民館が避難所になっているが、公民館に来ても、食事や身の回りのことなどやってくれる体制がないので、ほとんど避難しない。 	<ul style="list-style-type: none"> ・離島の災害対策として、関係機関・局・区が連携し、物資・人員の輸送手段の検討、避難所の機能強化、各種防災計画の整理・拡充を図る。 ・災害時の停電対策について、公民館に整備した給電設備を円滑に活用できるように運用を図る。 ・災害時における島民の迅速な避難行動や、避難所運営職員が渡航できないなどの状況に対応できるように、防災訓練実施の支援に努める。 ・避難に支援が必要な高齢者などを把握し、実際の支援体制を、関係機関と連携して検討する。 ・避難所における備蓄食糧の拡充について検討する。

分野	現状と課題	住民の意識・意見	施策の方向性
8 交通	<ul style="list-style-type: none"> ・施設の経年劣化に伴う補修費の増加、昨今の社会情勢による船舶燃料の高騰など経常収支状況はますます悪化している。 ・H24 より日曜日1便運航から2便運航へ増便し、利便性向上 ・外海を運航するため波高の日に欠航することが多い。 ・人の運賃同様、物資の輸送コストもかかることから食品や灯油など生活必需品も割高となっている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・船賃、欠航率が高い。 ・定期船の便数が少ない。 ・輸送コストがかかる分、値段が高い。 ・航路維持は、絶対。欠航が続くと、生活への支障が大きすぎる。 ・日用品などの物資は定期船で割引して運べるように配慮して欲しい。 ・病院への定期通院及び付き添いの人の運賃割引や、免除を実施して欲しい。 	<ul style="list-style-type: none"> ・安全管理規定を遵守し、安全運航に努めていく。 ・小呂島航路は国庫補助航路に指定され、国・県から健全経営が求められる中、島民人口の減少や高齢化により利用者が減少するなど厳しい状況にあるが、今後も地元の需要動向にあわせて、国・県との協議を図る。 ・生活必需品の輸送や島民の利便性向上のため、無人航空機（ドローン）や自動配送ロボットを活用した、島までの物資輸送や島内での荷物配送などを関係機関と連携して研究する。
9 情報・通信	<ul style="list-style-type: none"> ・光回線は整備されていないが、無線の高速通信であるLTE回線が整備されており、インターネット接続は可能な状況にある。 	<ul style="list-style-type: none"> ・10年前と比較すれば、インターネットや携帯電話の接続状況は良い。 ・携帯電話大手2キャリアしかないので、残りのキャリアも使えるようになって欲しい。 	<ul style="list-style-type: none"> ・新たなサービスも含めた情報通信サービスに関する情報収集を行うとともに、その動向や島の実情を見ながら今後検討を行っていく。

分野	現状と課題	住民の意識・意見	施策の方向性
10 自然環境	<ul style="list-style-type: none"> ・海に囲まれた自然豊かな環境である。 ・ハチジョウススキ群落や嶽宮神社周辺の照葉樹林は環境省の特定植物群落として選定されている。 ・貴重な鳥類が生息し、野鳥や渡り鳥の観察ポイントである。 	<ul style="list-style-type: none"> ・自然が豊かである ・以前と変わらない自然が残った。 ・磯焼けで海藻がなくなっており、藻場再生に力を入れているが効果はない。 ・地球温暖化の影響で海の藻がなくなり、サザエ・アワビが減少して、海士が働けなくなってしまっている。 ・発砲スチロールなどの漂着、漂流ごみが多く、回収、処理が大変。 	<ul style="list-style-type: none"> ・関係機関と連携し、不法投棄や漂着ごみなどの処理について対応策を検討していく。 ・自然体験などを活用した来訪者との交流を関係機関と連携して検討していく。
11 エネルギー	<ul style="list-style-type: none"> ・太陽光発電などの再生可能エネルギーの活用が期待されるが、実現していない。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ガス、ガソリンは船で搬送しており、不便である。 ・ガソリン、油が高騰していて生活に負担がかかっている。 ・将来的に、島内でエネルギーを自給する必要性が高い。 	<ul style="list-style-type: none"> ・太陽光発電を中心とした再生可能エネルギーの導入の推進を図る。

分野	現状と課題	住民の意識・意見	施策の方向性
12 観光／地域間交流	<ul style="list-style-type: none"> ・島特有の風光明媚な景色や、新鮮な水産資源を有しているが、ガイドはおらず、食事処がないなど受け入れる体制が整っていない。 ・釣り客が多く訪れている。また、猫を目的とした来島も増えているが、ごく一部にマナーの悪い人が見られることから、マナー向上を求める声が多い。 ・また、島民の生活空間にまでは入ってきて欲しくないが、来島者に対する観光ルールがない。 	<ul style="list-style-type: none"> ・観光客が増えるほどにごみが増える。 ・釣り客のマナーも悪い。 ・また、島民の生活空間にまでは入ってきて欲しくないので、島の観光のルールを定める必要がある。 ・色んなルールや料金などを考えて、釣り客を快く迎え入れられるようになれば良い。 ・観光する場所が少ないので、難しい。 ・観光振興をするのなら、観光資源を探していくところから始まる。 ・しまづくり協議会で、大学とコラボレーションした新商品を開発している。 	<ul style="list-style-type: none"> ・地域の意見を踏まえながら、観光資源の洗い出しや情報発信、民間事業者のマッチングなどを図る。 ・インターネットやSNSなどによる迅速で楽しい観光情報の発信を支援する。

分野	現状と課題	住民の意識・意見	施策の方向性
<p>13 地域文化</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・島内には神社や薬師寺堂などが点在し、嶽宮神社周辺のもは、持ち出し禁止の禁忌がある。 ・大陸に近い島であることから砲台跡や弾薬庫跡などの戦時遺構も残っている。 ・自然を活かした観光ルートなどは作っていないし、ガイドや観光のルールなど受入体制はできていない。 ・島には山笠や万年願などの伝統行事が行われているが、高齢化などにより担い手が不足している。 	<ul style="list-style-type: none"> ・島内の歴史は後世に伝えていかなければならないと思う。 ・神社巡りは、観光コンテンツとなる。 ・灯台の方まで漁船を出して周遊すると子どもは喜ぶ。 	<ul style="list-style-type: none"> ・地域に伝わる伝統文化などを伝承していくことの必要性について意識の共有化を図る。

分野	現状と課題	住民の意識・意見	施策の方向性
<p>14 人材</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・しまづくり協議会を中心に、住民自らが地域を創造・運営するという共通認識をもち、ワークショップなどによる地域課題の把握、課題解決に向けた自主的な取り組みを実践してきた。 ・地域づくりの担い手として地域おこし協力隊に期待する声も上がっており、「移住・定住支援」「島民と島外の人をつなぐコミュニティづくり・ルールづくり」「独居高齢者の介護」「漁業の手伝い」などを求めている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・島の発展には島外人材の必要性を痛感。 ・島全体の人口が減っているため、人材をどのように定住させるのかが大事だが、その具体的な方法が分からない。 ・新しい人に来てもらっても、住む場所が準備できていない。 ・地域おこし協力隊にぜひ活動して欲しい。 ・今後、島外からの来島者を増やして、小呂島の経済を発展させたいが、その際に必要となるのが、島民と来島者の間に立ち入ってルールづくりをしていくこと。そういった中立的な立場に立って小呂島のために活動してもらえれば、と思う。 ・他にも「コミュニティづくり」や「水産業の手伝い」などの仕事内容に期待している。 	<ul style="list-style-type: none"> ・しまづくり協議会が中心となり、しまづくり計画に多くの人を巻き込みながら実践する。 ・地域おこし協力隊の活用及びその受け入れ体制構築を、関係局や島の関係者などと連携して検討する。

